

『アンチ＝オイディプス』におけるスピノチスム

小谷晴勇

ドゥルーズへのスピノザの影響の大きさは周知のごとくだが、それが語られるのは『スピノザ』（以下Sと略記）や『スピノザと表現の問題』（以下SPと略記）の独創的なスピノザ解釈によってであり、また『ミル・プラトー』（以下MPと略記）の6部「1947年11月28日―いかにして自らを器官なき身体にするか」の一節「結局、CSOに関する最も偉大な書物は『エティカ』ではなからうか?』という唐突な一文によってである。SPに遅れること3年後に発表された『アンチ＝オイディプス』（1972、以下AOと略記）は、ドゥルーズ・ガタリの第一作であり、68年の5月革命の直後に出会ったガタリの刺激によってドゥルーズが伝統的地平から大きくその外部へと歩みをすすめた記念碑的著作である。そのタイトルによっても容易にわかるように、AOの主題はフロイト流の精神分析批判であり、オイディプス・コンプレックスの概念を批判して、無意識の解釈に家族主義的次元を越えた政治的・社会的な次元を組込もうとした。その結果、少なくとも表面的にはフロイトとマルクスとの批判的統合といった外観を呈するように仕上げられた。

（オイディプス・コンプレックスという概念の狭隘さは批判されるが、無意識の概念は根本的なものとして受け入れられている。）AOは、まず第一にフロイト（及びネオ・フロイディアンとしてのラカン）とマルクスとの関係において論じられる。人間の内面的構造に関するフロイトの理論と人間の外部的構造に関するマルクスの考察とを総合することによって真に全体的な理論を構築することができる⁽²⁾と考えた人々に、著者たちも加えようというわけである。またニーチェがしばしば登場するため、ニーチェとの関係も指摘される⁽³⁾。しかしながらスピノザの影響、スピノザとの関係は指摘されていないし、従って論じられてもいない。通念の水準において考えるかぎり、これは当然の事だと言える。通常のスピノザ像を思い浮かべてみるとよい。決して嘆かず悲しまず、永遠の相の下に事物を認識して、至福に達する道を説く孤高の哲学者と、この書物のアナキーで荒々しい性格には、どこにも共通性がないように思われる。（スピノザの静謐なる神とAOの喧騒たる欲望する機械、また前者の直観知と後者のスキゾ分析との対照。）だがよく考えてみようではな

いか。例えば彼らの政治性について。AOはその成立のきっかけにも、内容においても、極めて政治的である。それは5月革命の敗北をふまえて二人の手によって書かれたものだし、欲望の政治性を無意識に見いださんとしてスギゾ分析を提唱する。他方スピノザは、そのほぼ三百年前に倫理学的著作を中断して『神学・政治論』（以下TTPと略記）を書き、さらに死の直前まで『政治論』を書き続けた程の「政治的人間」であった。あるいは物質の評価について、AOでは無意識の分析に際して唯物論的精神医学が提唱されている⁽⁴⁾。スピノザは精神とともに身体・物体を重視する心身平行論を展開し、西洋思想史の伝統からすれば異常に思える程に後者を尊重したために、唯物論者と誤解された程であった。そもそも現代屈指のスピノチストで、現代思想界におけるスピノザ・ルネッサンスの火付け役であるドゥルーズをその著者の一人に持つ本が、スピノザと全く無関係であるはずがないではないか。すでにそのいくつかの点を指摘したように、AOとスピノザの思想には多くの類似性・共通性が確かに存在する。そこで以下の叙述において、従来はほとんど論じられた事のない両者の関係を立ち入って考察してゆきたい。

1 一元論と内在主義

AOにおけるスピノチスムは、第一にその一元論において表現されている。この一元論はスピノザ哲学において、實在の全体を唯一の実体とその変様によって説明しようとする哲学的枠組みをとっている。したがってスピノザ主義は当然内在主義となる。そして我々には、AOの全体がこの実体とその変様としての諸様態という思想

の枠組みから大きな影響をうけて成立しているように思われる。(スピノザの存在論の根本的な内在主義的性格は哲学的常識であり、ここでは多言を要すまい。ただ「エティカ」(以下Eと略記)第一部と、研究者による注解を参照されたい。)

AOのスピノザ的一元論と内在主義に言及するためには、その基本的な主張を理解しなければならない。AOの根本概念は「欲望する生産」production désiranteである。AOの基本的な主張は「欲望する生産」の一元論である。「欲望する生産」とは、ドゥルーズがタリによって批判的に再構成されたフロイトの無意識の作用によって行われる生産のことである。だがそれは夢や神話などの非現実的なものを生産するのではない。無意識は現実的生産をおこなうのだ。この現実性を強調するために、AOでは無意識を「機械」machineと呼ぶ⁽⁵⁾。ここから無意識とは「欲望する機械」「machines désirantes」である、という主張が生まれる。無意識は「欲望する機械」であり、それは現実的生産としての「欲望する生産」をおこなう。一般に、無意識のおこなう生産が対比して考えられるのは社会的生産である。人間に対して外部的な社会的生産と、内部的な無意識のおこなう生産がある。前者は資本の経済学としてマルクスによって探究され、後者はリビドーの経済学としてフロイトによって探究された。前者は人間の外的現実に関する真理であり、後者は内的現実の真理である。ゆえにマルクスとフロイトの理論的総合によって、人間に関する真の全体的な理論が構築されるだろう。このような発想からマルクスとフロイトの理論的総合が幾人かの思想家たちによって試みられた。だが、このような二元論には根本的な欠陥がある。というの

はこの場合、無意識は非現実的な幻想を生産することになるからである。これに対してA Oは次のように考える。「…社会的生産は、もつぱら、一定の諸条件のもとにおける欲望する生産そのものなのだ。」⁽⁸⁾リビドーの経済と資本の経済とがあるわけではない。「欲望する生産」(または欲望する機械)と「社会的生産」(または社会的機械)とは異なる体制のもとの同一の生産(または機械)である、その区別は単にそれらの大きさの比に依じた体制の相違にすぎない、というわけだ。A Oではこれを別の概念で言い換え、前者を分子的な生産(または機械)であり、後者はモル的な生産(または機械)であると説明する。分子的 moleculeaire とはミクロ・無意識の次元を示し、モル的 molaine とはマクロ・統計学的な次元を示す。⁽¹⁰⁾「実在するものの生産というひとつの生産があるだけなのだ。そして、恐らく我々はこの単一性を二つの仕方で表現できるだろうが、しかしこの二つの仕方はひとつのサイクルとしての無意識の自動生産を構成している。一方ではあらゆる社会的生産が一定の諸条件の下で欲望する生産から生じる、と言える。…しかし同様にさらに厳密に、まず欲望する生産が社会的なのであって、解放に向かうのは最後においてでしかない、と言えるのだ。」⁽¹¹⁾A Oは決してマルクスとフロイトとの統合の試みではないのであって、貨幣の経済学とリビドーの経済学とがあるのではなく、「欲望する生産」のみが存在する。A Oは神なき汎神論、汎「欲望する生産」論である。

スピノザ哲学の一元論の重要な特徴は内在主義である。これは実体とそこから必然的に生じる諸様態によって自然の全体を説明しようとするために生じた特徴である。内在主義の主要な意義は、実在的世界(≡自然)をその只中から理解しようとするところにある。世界に対して外在的ないかなるものも、視点も価値観も認めないこと、とりわけ超越的なものを認めないこと、そして世界をあるがままにその只中から理解していこうとする姿勢、これが内在主義の基本的立場である。スピノザ哲学において、神はあらゆるものの内在的原因であって超越的原因ではない。⁽¹²⁾また個物は神の属性の変様であり、神の属性を一定の仕方で表現する様態である。⁽¹³⁾そして能産的自然としての神と所産的自然としての諸様態とを、すなわち自然の全体を、その真の原因によって内的な必然性において理解し認識する事が、至福(それにいたる道を説くことがEの最終的な課題である。)の前提であった。諸事物を内部から、その必然性においてあるがままに理解すること。そのために超越的原因としての神は勿論のこと、善・悪、美・醜、功・罪、秩序・混乱、などの諸価値、そして目的(「観」といった外的なもの一切は、虚構として退けられることにな⁽¹⁴⁾る。ドゥルーズはスピノチズムのこのような内在主義を倫理的な世界観と呼び、倫理学(≡E)と道徳は根本的に対立すると説明する。なぜならば後者は虚構された外的な諸価値の上に成り立つものだからである。⁽¹⁵⁾

実体とその変様によって実在の世界を説明するという思想的枠組みを採用する以上、A Oも当然その記述は内在主義的になる。A Oは歴史的世界を徹底した内在主義によって説明し、記述する。そのための概念装置は二つのセリーを形成している。一つは「欲望する機械」の無意識のセリーであり、もう一つは「大地の身体」「専制君主の身体」「資本の身体」といった身体のセリーである。身体と

は単なる人間一個人の身体といった意味よりもむしろ社会体・政体を意味している。すなわち基体となるもの、「欲望する生産」の機能の仕方によってさまざまに変様する質料あるいは素材である。二つのセリーは一つの實在の二つの側面をそれぞれ表現している。ここでもまたスピノザ的な概念の操作・構成がみられる。あえて言えば、無意識のセリーは精神的なもの、身体のセリーは物質的なものをあらわし、それらはあたかも実体の本質を構成する諸属性のごとくである。さらに我々はA Oの根本概念である「欲望する生産」を説明して、それと本性上同一であり、体制・大きさによってのみ區別される「社会的生産」または「社会機械」が存在することを述べた。ここでいう身体とはこの「社会機械」である。この「社会機械」の歴史の変様が身体のセリーを構成する。すなわち、「大地の身体」とは人類学が対象とする原始的社会の身体||社会体であり、「専制君主の身体」は専制君主国家の身体||社会体、「資本の身体」は資本主義社会の身体||社会体である。(ドゥールズ・ガタリは歴史的社会をこの三つの類型に分類する¹⁶)。そして社会体の変様は、結局「欲望する生産」の変様なのだ。結局A Oは歴史的世界の変様を、「欲望する生産」という根本概念の諸変様によって説明しているのである。我々はこの概念操作に、実体とその諸変様とによって實在の全体を説明するスピノチスムと同様の内在主義を容易に見出すことができる。

我々は今、A Oの歴史の変様過程の記述をとりあげて、スピノザ的な実体と属性の區別を「欲望する生産」と無意識のセリー・身体||社会体のセリーにあてはめようとしたが、ドゥールズ・ガタリ自

身がスピノザに由来するこの區別を基準として説明している概念がある。「欲望する機械」の概念である。彼らによれば「欲望する機械」は、部分対象と「器官なき身体」を、一方は機能する部品として、他方は不動の動者として要素とすることによって構成される¹⁷。そしてそれらの関係は実体と属性の関係に等しいと言われる。「器官なき身体は、言葉の最もスピノザ主義的な意味において内在的実体である。そして諸々の部分対象は、それらが實在的に區別され、このため排他あるいは対立の関係に入ることができない限りにおいて実体に属するその究極的属性である。」¹⁸と¹⁹。この事と、「器官なき身体」が部分対象と共に「欲望する機械」を構成する事を合わせて考えるとドゥールズ・ガタリが何を述べようとしているかが分かる。社会体としての「資本の身体」が「器官なき身体」へと変様するとき、無意識は「欲望する機械」として作動する。「器官なき身体」は歴史的世界における究極の社会体であり、それには「欲望する機械」が対応する。ここで「器官なき身体」とは階層的秩序・有機的組織なき社会体であり、「欲望する機械」が機能するとは無意識の分裂的な過程が解放され完成されることである。「欲望する生産」の究極の形態が「器官なき身体」であり、「欲望する機械」である。無意識を「欲望する機械」として捉え返すことはA Oのテーマのひとつであり、そのような中心的概念をスピノザの用語で説明すること自体、A Oにおけるスピノチスムの根源的な性格を物語っているといえよう。

2 「自然」の思想

スピノザとA Oに共通するのは、それらの自然主義である。ここで言う自然主義とは、人間を世界の中で特権的な存在と考えるのではなく、人間は世界という自然の一部としてそこに内属するという思想である。人間と自然との対立を超えること、すなわち人間は自然の一部分である、という思想である。

スピノザにとって神は能産的自然としての自然であり、諸様態すなわち個物は所産的自然としての自然である。従って個物として存在する人間は自然の一部分である。このような自然の哲学は、近代的人間主義の超克を企てようとするとき、とりわけ重要な意義をもってくる。A Oもこの現代思想の一翼を担っている。その自然主義はすでに冒頭から現れ、本書の全体を貫いている。ピュヒナーによって再構成されたレンツの散歩を見よ。「レンツは人間と自然とが二元的に区別される以前に、この区別を条件とする一切の位置の決定以前に身を置いたのだ。彼は自然を自然としてではなく、生産の過程として生じる。もはやそこには人間も無ければ自然も無く、ただその一方を他方の中に産出する過程、諸機械を連結する過程だけがある。」⁽²⁰⁾そしてここで言われている生産の過程としての自然とは「欲望する生産」⁽²¹⁾のことである。「この過程においては人間—自然の区別も存在しない」⁽²²⁾ここでは人間は万物の王者ではなく、動物・植物・鉱物・その他あらゆるものと関係をむすび、それらと深くつながっている。人は身体に樹を、口に乳房を、尻に太陽をつなぐことをやめない。生産・配分・消費の全体を含むこの生産におい

ては、人間と自然とは同一の実在のうちに捉えられる。このとき人間は「自然人」Homo natura として捉えられる。

3 物質・身体を尊重する「マテリアリズム」

また物質・身体を重視するという点で、スピノザとA Oは共通性をもっている。スピノザは心身平行論を主張したのであり、決して唯物論者ではないが、伝統的には精神や心に対して軽視されていた物質や身体を、前者と同じだけの重要性を持つものとして考えたという意味で、彼は物質・身体を尊重したといえる。⁽²³⁾A Oは唯物論的精神医学 *psychiatric materialiste* を標榜する。⁽²⁴⁾すなわち精神の深層である無意識を「欲望する機械」という機械として捉えたゆえんである。それは工場の機械のように生産する。無意識は実在の生産を行うのである。実在といってもそれは夢や神話といった心理的実在ではない。無意識の生産をもっぱら心理的実在の生産と考えていることが、従来の深層心理学の限界であった。肝心なことは、それを現実の社会的生産と同じものとして考えることである。無意識の生産が社会的生産に組込まれているという認識が必要なのだ。さらに言えば無意識の生産は社会的生産の一部であるというより、その条件なのだ。そしてまた社会的でない無意識の生産はありえないのである。現実的な社会的生産として「欲望する生産」が存在する。それは無意識と社会体とを共に貫き、精神と物質とを共に包み込む全体的・包括的な生産の過程である。ドゥルーズ・ガタリの言う唯物論的精神医学とは、精神現象の社会的な実在性、物質的過程との相即不離の状態の認識を表明したものであろう。

4 欲望の重視

やはり、我々はスピノザが欲望 Cupiditas を人間の本质と考えたことを思い出さずにはいられない。「欲望とは人間の本质そのものである」⁽²⁵⁾。これらの事を考え合わせると、AOにおけるスピノザ主義は欲望の重視という形で現れている事がわかる。スピノザは身体と精神に同時に係わる自己の存在に固執しようとする努力を衝動と呼び、この衝動の自己意識を欲望と定義し、さらに両者は本性上同一であると考⁽²⁶⁾えた。他方、AOでは「欲望する生産(機械)」が至る所で機能し生産する実在として、また実在的な歴史の条件として考えられていることが全体から明らかである。AOにおける欲望 desir の概念は、欲求 desirer と区別されて定義されている。すなわち、欲求とは今ここには無い何かを求めることであり、欠如と本質的な関係を結んでいる。それに対して欲望は欠如とは関係がなく、実在的な・現実の生産をおこなう生産者であり、諸々の部分対象と流れを機械として作動させる受動的総合である。そして「欲望する機械」は、部分対象を機能する部品として、「器官なき身体」を不動の動者として構成されることはすでに述べた。そこで我々はこのAOのテーマ(無意識の概念の刷新)に直接係わるキーワードとしての「欲望する機械」が、実体と属性というスピノザの用語によって説明されていることを見た。スピノザは欲望を人間(または個物・有限様態)の本质とみなして、有限様態の世界を欲望から説明しようとし、ドゥルーズ・ガタリは歴史的世界を「欲望する生産」によって説明しようとする。しかも彼らの概念はスピノザ主義的に

構成されているのだ。

5 政治的問題意識

さらに両者に共通するものは、政治的問題意識である。ドゥルーズ・ガタリはスピノザのことを、政治哲学の根本問題を提起した人として評価している⁽²⁸⁾。その問題とは、人々はなぜ隷属をみずから欲するの、ということである。TTPの序文においてスピノザは次のように述べている。「若し、人間を誤謬のなかに留め置き、恐怖心を宗教の美名で彩って人間を抑制するに利用し、かくて人々をして隷属のために戦うこと恰も福祉のために戦う如くならしめ、且つ一人の人間の名誉心の為に血と生命とを捨てることを恥としてでなく却って最大の誉れと思わしめるといったような、そうした事どもが若し君主政治の最高の秘訣であり、君主政治の最大の関心事であるとしたら、反対に自由なる国家に於ては、これ以上に不幸なことが考えられることも出来ないし、試みられることも出来ないのである」⁽²⁹⁾。時に人民は隷属を欲し、自己の生命までも犠牲にすることをいとわれない。なぜ人民はこれほどまでに非合理的なのか? ドゥルーズによれば、TTPの主要な問いの一つが、この隷属を欲する非合理的な人民の問題である⁽³⁰⁾。

ドゥルーズ・ガタリはスピノザの言葉を受け、それをさらに延長して次のように述べている。驚くべきことは、あるひとが盗みをはたらくということではない。またある人々がストライキをするということでもない。そうではなくて、むしろ飢えている人が必ずしも盗みを働くわけではないということであり、搾取されている人々が

必ずしもストライキをしないということこそ驚くべきことなのだ。

「なぜ人々は何世紀の間、搾取や屈辱や隷属に耐え、単に他の人々のためのみならず、彼ら自身のためにもそれらのことを欲するまでになるのだろうか。」ライヒも言う通り、時として人はファシズムすら欲するのだ。⁽³¹⁾ この問いに答えるために彼らは欲望そのものの分析を行う。そしてそれがもともと政治的・社会的であることを発見する。欲望の備給 investment は社会的である。そしてこの社会的備給には二つの方向があり、その一方は中央集権的な組織体を備給するパラノイア型のそれである。そしていま一方が、隷属に反対し革命的な流れにしたがって逃走線をひくスキゾフレニー型の備給である。あるとき欲望はファシズムを欲望し、またあるときは革命を欲望するのである。⁽³²⁾ これは決して抽象的なことではない。いたるところに「欲望する機械」が作動している。それは今ここに機能している。たとえば官僚が書類を愛撫するときそこには欲望がある。裁判官が裁判をおこなう態度のなかに欲望がある。無意識の欲望と政治性・社会性とはこのようなものである。

6 感情の分析と欲望の分析

このようなA Oの欲望の分析はスピノザの感情の分析の手つきを思わせる。スピノザはEの第三部において、人間の感情の本性を探究し、それを詳細に分類している。彼は人間の感情を、身体的活動能力を増大あるいは減少させる身体の変状（とその観念）として定義し、それを三つの基本感情に分類する。基本感情とは喜び、悲しみ、欲望の三つであり、他の諸感情はこれらから生じるものとされ

る。彼によれば、喜びとは、この身体の活動能力の変化に応じて（ここでは心身平行論が前提とされている）精神がより大きな完全性へと移行する受動であり、反対に悲しみとは精神がより小さい完全性へと移行する受動である。⁽³³⁾（欲望についてはすでに述べた。）このように感情を二つの方向へ向かうものとして捉えるやり方は、すでに述べたA Oのスキゾ分析の方法に酷似している。スキゾ分析は、欲望を分析しそこにパラノイア型の欲望とスキゾフレニー型の欲望という二つの方向を見出し出していた。諸感情が喜びと悲しみに連なるものとして分類されるように、欲望もスキゾフレニーとパラノイアという二つの極をもっているのだ。そしてスピノザの感情の分析も、A Oにおける欲望の分析も、分析のための分析ではない。それらの分析は実践とともにある。それらは至福へ向かうための分析であり、解放へ向かうための分析である。スピノザ哲学とA Oの最も重要な共通点はここにある。それは解放へと向かうための実践哲学だということである。

7 喜びの開発と悲しみの告発、解放をめざす実践哲学

スピノザの感情の分析は詳細に涉って展開される。定義され説明された感情は48種類にもおよぶ。だが、ここで重要なことはその分析が、感情の生起と変化をめぐる行われていることである。いかえればこの分析におけるスピノザの関心が、身体の活動力の変化（増大するか減少するか）とそれに伴った精神の状態の変化（より小さな、またはより大きな完全性への移行）にあるということである。スピノザの感情の分析は、実践的な目的を持っている。それ

結 論

は活動力を増大するための、人がより小さな完全性からより大きな完全性へと移行するための予備作業である。悪い感情(すなわち活動力を減少させる感情)を除去し、あるいは矯正して、良い感情(活動力を増大する感情)を培うこと、すなわち倫理的な実践が諸感情の分析に連なるのである。それゆえスピノザは、第四部に「人間の隷属あるいは感情の力について」を書く。そこでスピノザは悲しみを告発し、喜びの開発を説く。悲しみを除去し喜びへと尊くこと、自己の活動力を増大し、受動感情から能動感情へと、より小さな完全性からより大きな完全性へと移行すること、これがスピノザの実践哲学の一般的な原理である。

一方A Oにおけるスキゾ分析の目的も、倫理的な実践にある。第一に、欲望の分析を通じて否定的なものを破壊しなければならぬ。いわば「悲しみとそこから生じる諸々の感情」「活動力を減少させるもの」を破壊しなくてはならない。ここではそれらはオイディプス、超自我、罪責感、去勢不安など「欲望する機械」に否定や欠如をもちこむもの、それを家族主義の枠の中で処理しようとするもの、結局はそれを放棄するもの、そしてパラノイア型の欲望である。第二に、スキゾ分析は、肯定的積極的任務を遂行しなければならぬ。それは、オイディプス、罪責感、不安などに対抗して「欲望する機械」の本性を見い出すこと、それを発見し機能させること、その社会性を見い出すこと、そしてパラノイア型の欲望から逃走線を引き、こと、結局「欲望の生産」の「過程」を完成することである。

A Oは以下の点でスピノザ主義的である。第一に、存在論的一元論とそこから生じる内在主義、実体とその変様という思想的枠組み。第二に、「自然」を尊重する思想であること。第三に、物質・身体を重視する「マテリアリスム」。第四に、欲望を本質としてとらえること。第五に政治的であること。第六に、欲望の分析の方法。第七に、解放をめざす実践哲学であること。

この次に我々は、MPにおいてスピノザがいかに扱われているか詳細に検討することを課題とするであろう。そして最終的には、彼のスピノザ研究(S、SP)も含めて、ドゥルーズにとってスピノザとは何かという問いに答えることが課題となるであろう。

注

(1) MP、190p。なおMPにはスピノザの名前が頻出する。MPにおけるスピノチスムは、別に一篇を設けて論じらるべき問題である。

(2) 蓮實重彦「スピノザとドゥルーズ 遭遇・強度・否定」(現代思想73年3月号)。小沢秋広「インテルメッツォ・アルト1からスピノザへ」(現代思想82年12月号)。

(3) このような見方の当否については後に論ずるが、A Oの英訳者マーク・シームは、英訳の序文でこの本をマルクスとフロイトの理論の総合の試みとみなすことは誤りであり、ニーチェとマルクスの組み合わせこそが土台となっていると述べている。

(4) (英訳の序文、XVIII〜XIV pを参照せよ。)

(4) AO、第1章、4。

(5) E、1、定義3と5、定理15、定理16、定理18などを参照せよ。また例えば『スピノザ／ライブニッツ』(世界の名著30、中央公論社、1980)の79 p、図1などを参照せよ。

(6) AO、34 p、邦訳41 p。「欲望が生産するならば、それは実在するものを生産するのだ。欲望が生産者であるならば、それは実在において、実在の生産者でのみあり得る。」

(7) ここで我々はドゥールズ・ガタリの機械の概念を規定しておかなければならない。今までに「欲望する機械」「社会機械」「技術機械」などといわれてきた「機械」の概念である。これは近代的な機械の概念(例えば、デカルトが人間の身体は機械であると主張した時の機械、ラ・メトリの「人間機械論」の機械)「機械論」の機械とは根本的に異なる。まぢが、それでもそれらとの連関に思いをめぐらせてはならない。それは「観念論」に対立する「唯物論」の立場から言われた機械ではない。ドゥールズ・ガタリの説明によれば、それは生氣論と機械論との対立を越えた「機械」である(AO、337〜42 p、邦訳338〜43 p)。もっとも簡潔な肯定的説明は、「機械」とはその各々が相対的に独立である異質の諸要素の機能する組み合わせというものである。例えば、〈乳房―ミルク―口〉の組み合わせは「欲望する機械」であり、〈人間―馬―弓〉の組み合わせは遊牧民の「戦争機械」であり、〈労働力―貨幣―素材―資本

家―…〉などの複雑な諸要素の組み合わせから資本主義の「社会機械」が構成される、といった具合である。「欲望する機械」はこのように定義される「機械」の中のある特殊な類型であり、これもまた独特の定義をもつ「欲望」の概念とともに後に本文のなかで説明されるだろう。

(8) AO、36 p、邦訳44 p。

(9) AO、38〜40 p、邦訳46〜7 p。

(10) AO、216〜7 p、邦訳224 p。

(11) AO、40 p、邦訳47〜8 p。

(12) E、1、定理18。

(13) E、1、定理25と系。

(14) E、1、付録。

(15) SP、第16章「倫理学的世界観」及び、S、第2章「エティカ」と道徳の差異について」を参照せよ。

(16) AO、第3章。

(17) 「部分対象」とは、メラニー・クラインとその学派によって導入された概念である。欲動の対象が人格全体ではなく、身体の部分であるとき、その目指されている身体の一部を部分対象と呼ぶ。具体的には、乳房、糞便、陰茎などであることが多い。(但しフロイトもすでに欲動の対象が人格全体に限らないという考えを述べている。)
「器官なき身体」とは、もとはアルトーの言葉で、臓器の有機的な組織が崩れ去り、それらがどろどろの液体となって溶け出した状態を感じる分裂症患者の特有な身体感覚をあらわしていた。すでにドゥールズは『意味の

論理学』においてこの言葉を引用しているが、それが哲学的概念に高められたのはA Oにおいてであるといえよう。

(18) A O、390 p、邦訳338 p。

(19) A O、336 pの図(邦訳336 p)を参照せよ。

(20) E、4、定理4。

(21) A O、8 p、邦訳14 p。

(22) A O、10 p、邦訳16 p。

(23) 例えば延長を神の属性としたこと(E、2、定理2)。認識における身体の関与を重視する考え方。また、身体のはかりしれない能力について(E、3、定理2の注解)等々。

(24) A O、第1章、4。

(25) E、3、諸感情の定義1。

(26) E、3、定理9の注解、及び諸感情の定義1。

(27) 欲望と欲求の差異については32〜3 p。邦訳39〜4 pを参照せよ。

(28) A O、36 p。邦訳44 p。

(29) 岩波文庫版、44 p。

(30) S、18 p。

(31) A O、37 p。邦訳44 p。

(32) A O、329 p。邦訳331 p。

(33) E、3、定義3、および定理11の注解。

(こたに・はるお 筑波大学大学院哲学・思想研究科)